

44 福岡・原三信氏家蔵「阿蘭陀外科

術式図譜絵巻」についての考察

蒲原 宏

福岡市の原家は代々三信を襲名する日本で最も伝統ある医家の一つであるが、第一五代三信氏が昭和六〇年に伝来の「オランダ外科相伝書」「人体解剖図」「阿蘭陀外科術式図譜絵巻」を原三信蘭方外科免許三百周年記念会として『蘭方医三百年』を刊行された。

「オランダ外科相伝書」は一六八五（貞享三）一〇月一八日の日付でヘンデレッキ・ラヨベイ（Henderik Obe）から外科術を学んだことからはじまり、アルベルト・クローン（Albert Croon）が外科術を弟子の原三信に知る限りのものを伝授した直筆の免状である。

「人体解剖図」は上述の六代原三信がレメリン（Johannes Remijn 一五八三～一六三二）の解剖書 *Pinax Microcosmographicus* を転写し、長崎通詞本木庄太夫の日

本語訳を添付したもので、すでに酒井シヅ氏によって詳細な研究に基づく解説が行われている。これは貞享四年九月二六日に筆記された、六代原三信の署名がある。

「阿蘭陀外科術式図譜絵巻」は一五代原三信の序文によると「フランスの外科医アンブラス・パレ（Ambroise Paré 一五一〇～一五九〇）の外科書の一部を模写したものである」とされている。

残念ながら、この「阿蘭陀外科術式図譜絵巻」には手写年代も筆者名も欠いている。

この外科術式図は、今まで「パレーの外科絵巻」として、富士川游先達以来、パレーの外科全集所蔵の図を踏襲筆写していたものとされてきた。

一六六五年（寛文五）に紅毛外科の免状をもらった嵐山甫安の免許状と共に平戸・松浦史料館に展示されている類似の①図巻を初め、この種の図巻は外科伝書の附巻として、②紅夷外科宗伝金瘡跌躐図（榎林栄休本・長崎大医学部・一七〇六年序）、③同名（旧呉秀三本・武田杏雨書屋・嵐山本）、④和蘭外科宗伝・心印受記附図（旧富士川游本・国会図書館、一七二四年記）、⑤南蛮外科手術図巻（荒木如

之筆・吉雄永章書・神戸市立南蛮美術館・一七九〇年記)、⑥金瘡跌療治之書(西玄哲筆・京大図書館・一七三五年記・無彩)、⑦伊良子家家蔵図巻(無年記)、⑧田中祐尾家家蔵図巻(無年記)など八の図巻と原家の図巻で九種、それに一七六九年(明和六)に伊良子光顛(一七三五一九七)の出版した『外科訓蒙図彙』を入れると一〇種となる。

これらの図巻に収載されている図は大体九二図であるが、これらの図を詳細に分類してみると、パレの外科全集オランダ語版でアムステルダムスキツペル(Schipper)初版(一六四九年刊で檜林栄休がW. Hoffmannから入手した同一本)、De Chirurgie ende Opera van alle de Werken van Mr. Ambrosius Paré)に載っている図は三三三図(三五・九%)にとどまった。

それに比してドイツのスクルテタス(ドイツ名Johann Schutes 一五九五—一六四五)の外科書『外科の兵器庫(Armentarium Chirurgicum)』からは四四図(四七・八%)で、引用原典不明が一五図(一六・三%)あることをすでに報告した。

原三信家の「阿蘭陀外科術式図譜絵巻」について、こ

れを二五図と分類し、パレの外科全集、スクルテタス(Scutetus)の外科書とやらに典拠不明とみられるものとの見地からの図譜の各図を振り分けてみると、パレ外科全集からと確実に言えるものは八図(三三%)スクルテタスの外科書から引用されたと確実に言えるものは一〇図(四〇%)、上記原書のどちらとも言えぬもの(類似度が高くて)が二図(八%)、現在のところ典拠が不明のものが五図(二〇%)という結果になった。パレ外科全集オンリーではなかった。

この六代原三信(？—一七一)の筆になると推定される「阿蘭陀外科術式図譜絵巻」もやはり、フランスとドイツの外科書の二つから影響を受けた外科図譜であることが証明されたわけである。

(日本歯科大学医の博物館)